

# 1 農業総産出額及び生産農業所得（全国推計）

(1) 農業総産出額は、近年、米、野菜、肉用牛等における需要に応じた生産の進展等を主たる要因として増加傾向で推移しており、平成27年以降は3年連続で増加してきた。

平成30年は、野菜（葉茎菜類）、豚、鶏卵等において生産量の増加から価格が低下したこと等により、前年に比べ2,184億円減少し、9兆558億円（対前年増減率2.4%減少）となっているが、引き続き高い水準を維持した。

(2) 生産農業所得は、近年、農業総産出額の増加等を主たる要因として増加傾向で推移しており、平成27年以降は3年連続で増加してきた。

平成30年は、農業総産出額の減少等により、前年に比べ2,743億円減少し、3兆4,873億円（同7.3%減少）となっているが、引き続き高い水準を維持した。

図1 農業総産出額及び生産農業所得の推移

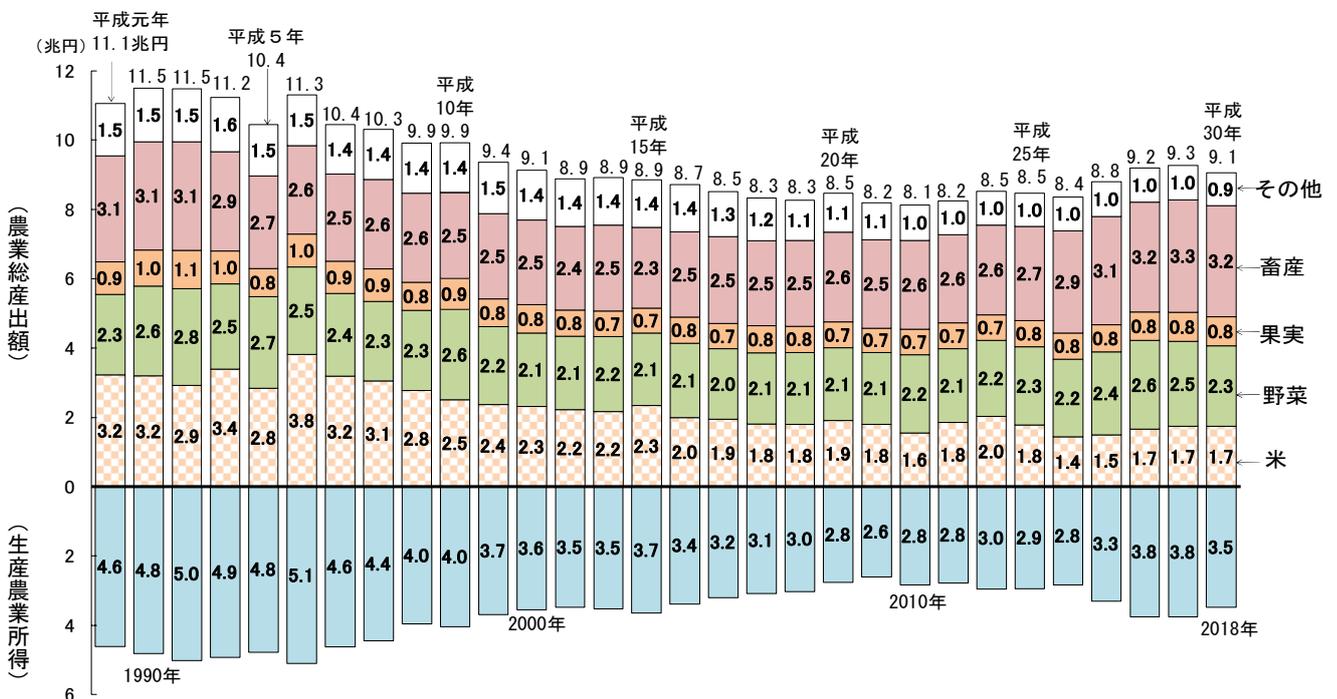
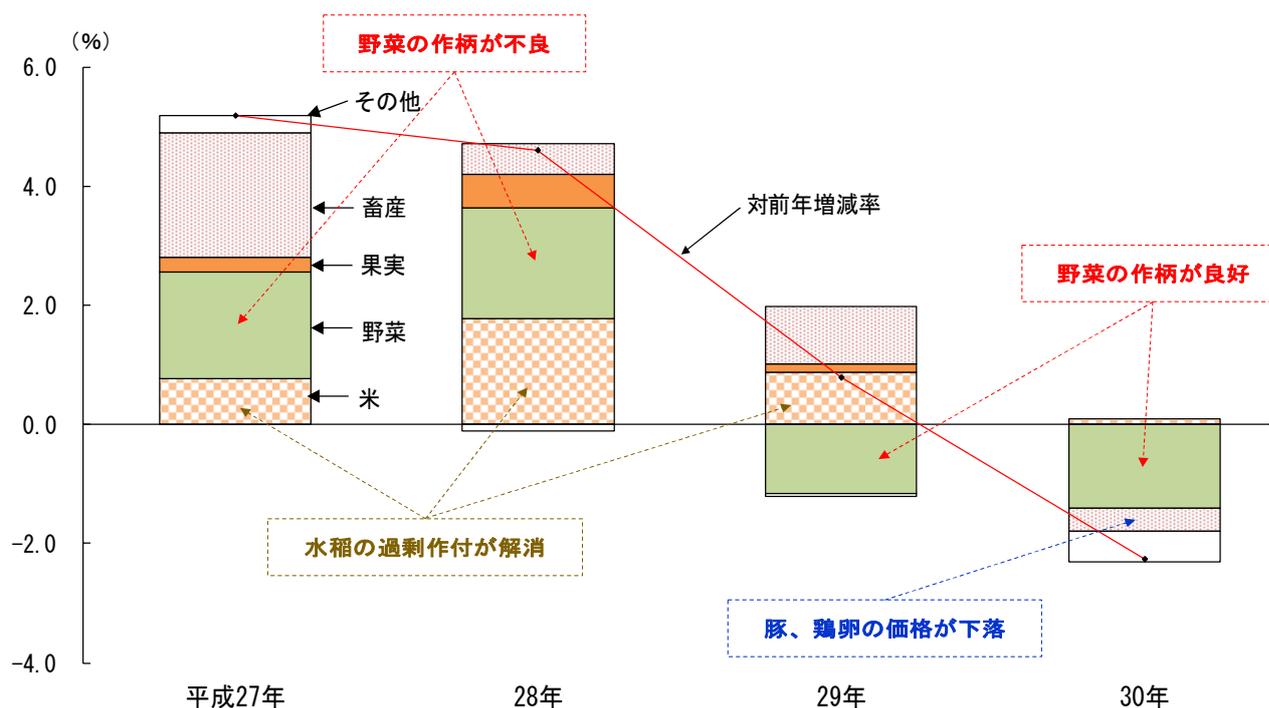


図2 農業総産出額の対前年増減率と部門別寄与度の推移



【関連データ】

主要農産物の輸出額の推移

区分	平成25年	26	27	28	29	30	対前年増減率	
							29/28	30/29
	億円	億円	億円	億円	億円	億円	%	%
農林水産物 計	5,505.2	6,117.1	7,451.0	7,502.1	8,070.6	9,067.6	7.6	12.4
農産物 計	3,136.4	3,569.3	4,431.2	4,593.5	4,966.5	5,660.6	8.1	14.0
うち 米	10.3	14.3	22.3	27.1	32.0	37.6	18.1	17.5
野菜	60.3	72.8	97.8	108.1	100.6	104.9	△ 7.0	4.3
果実	136.8	170.6	252.6	269.0	265.6	318.1	△ 1.3	19.8
切花	1.7	3.4	5.1	7.2	8.6	8.9	20.3	3.1
植木等	94.3	81.4	76.1	80.3	126.3	119.6	57.2	△ 5.3
緑茶	66.1	78.0	101.1	115.5	143.6	153.3	24.3	6.8
牛乳	5.3	6.2	7.2	8.6	10.0	11.0	15.2	10.8
牛肉	57.7	81.7	110.0	135.5	191.6	247.3	41.4	29.1
豚肉	4.4	6.8	8.1	8.5	10.1	10.4	18.9	3.0
鶏肉	13.3	17.0	16.6	17.2	19.8	19.8	14.8	0.2
鳥卵・卵黄	3.3	4.9	8.9	10.2	12.5	16.9	22.2	35.4

資料：農林水産省国際部「農林水産物輸出入概況」

注：1 金額は、FOB価格（Free on board、運賃・保険料を含まない価格）である。

2 米には援助米を含まない。また、野菜・果実には調製品、牛乳には部分脱脂乳、牛肉・豚肉・鶏肉にはくず肉を含む。

3 植木等とは、植木類、盆栽類、鉢物類である。

(3) 部門・品目別

ア 米

近年、主食用米の需要の減少が加速化する中で、主食用米からそれ以外の作物への転換が進む等、需要に応じた米生産が進展し、超過作付が解消したことから主食用米の価格が回復してきており、平成27年以降、米の産出額は3年連続で増加してきた。

平成30年は、前年に比べ59億円増加し、1兆7,416億円（同0.3%増加）となった。

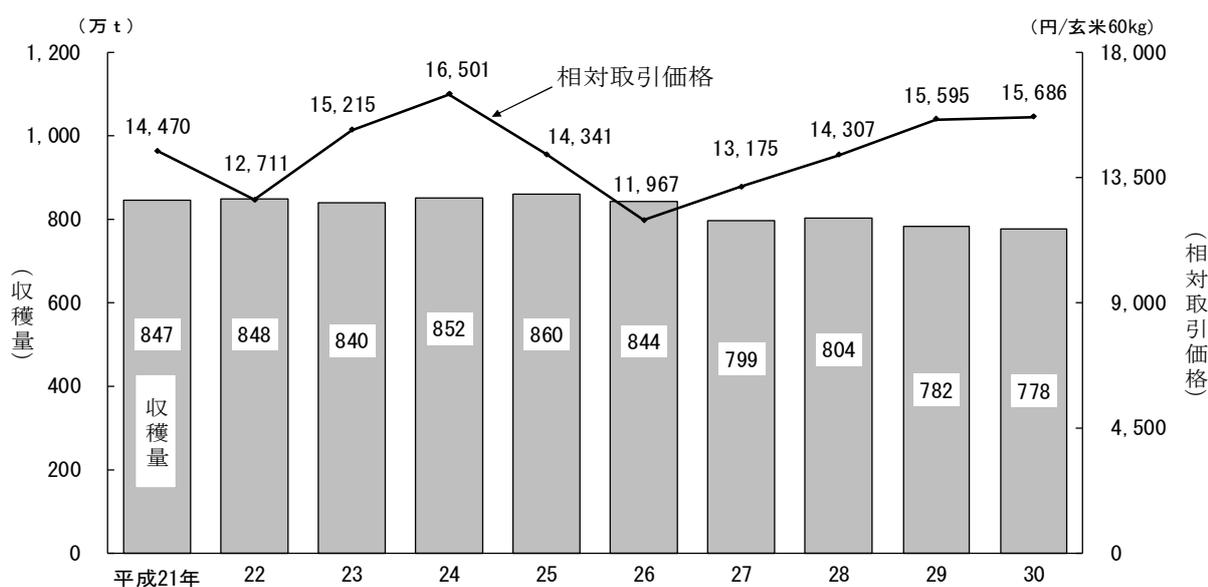
この要因としては、北海道、新潟県等の一部の産地で日照不足等の影響により作柄が悪かったものの、平成30年産から実施された行政による生産数量目標の配分の廃止等の米政策改革により、生産者自らの判断により需要に応じた生産を行う中で、低価格帯を中心に主食用米の価格が上昇したこと等が寄与したものと考えられる。

表1 米の産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	17,807	14,343	14,994	16,549	17,357	17,416
対前年増減率	%	△12.2	△19.5	4.5	10.4	4.9	0.3

【関連データ】

米の収穫量及び相対取引価格の推移



資料：農林水産省統計部「作物統計調査」及び農林水産省政策統括官「米穀の取引に関する報告」  
 注：相対取引価格は、当該年産の出回りから翌年10月(平成30年は翌年8月)までの通年平均価格である。

## イ いも類

ポテトチップス原料用等の加工食品向けばれいしょの需要が増加する中、原料原産地表示が拡充されることと相まって、加工原料用に国産品を求める実需者ニーズが高まってきており、平成26年以降、いも類の産出額は2千億円台前半で推移してきた。

平成30年は、前年に比べ147億円減少し、1,955億円（同7.0%減少）となった。

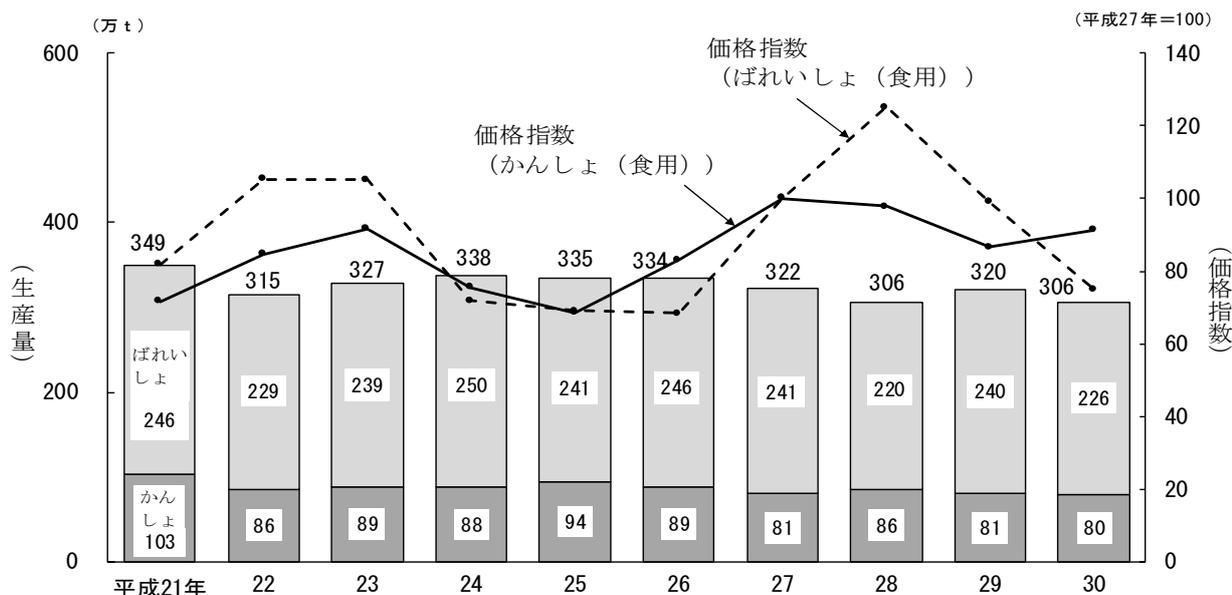
この要因としては、焼き芋ブームによりスーパー・コンビニでの店舗販売が普及する等、焼き芋に適したかんしょ（べにはるか、安納いも等）の生産が拡大した一方で、食の外部化の進展により家計消費量が減少する生食用ばれいしょでは、天候不順等により生産量が減少したものの、市場の供給が潤沢であり、価格も低下したこと等が影響したものと考えられる。

表2 いも類の産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	1,985	2,075	2,261	2,372	2,102	1,955
対前年増減率	%	7.8	4.5	9.0	4.9	△11.4	△7.0

### 【関連データ】

いも類の生産量及び価格指数の推移



資料：農林水産省政策課「食料需給表」及び農林水産省統計部「農業物価統計調査」

注：1 生産量は年度の数値であり、平成30年の生産量は概算値である。

2 価格指数の基準時は、平成27年（暦年）の1か年である（以下同じ。）。

3 平成26年以前の価格指数は、リンク係数を用いて接続した（以下同じ。）。

## ウ 野菜

近年、食の外部化の進展や加工食品に対する原料原産地表示の義務付けの拡充を背景に、加工・業務用への国産野菜を求める実需者ニーズが高まってきており、平成27年以降、野菜の産出額は2兆円台半ばで推移してきた。

平成30年は、前年に比べ1,296億円減少し、2兆3,212億円（同5.3%減少）となった。

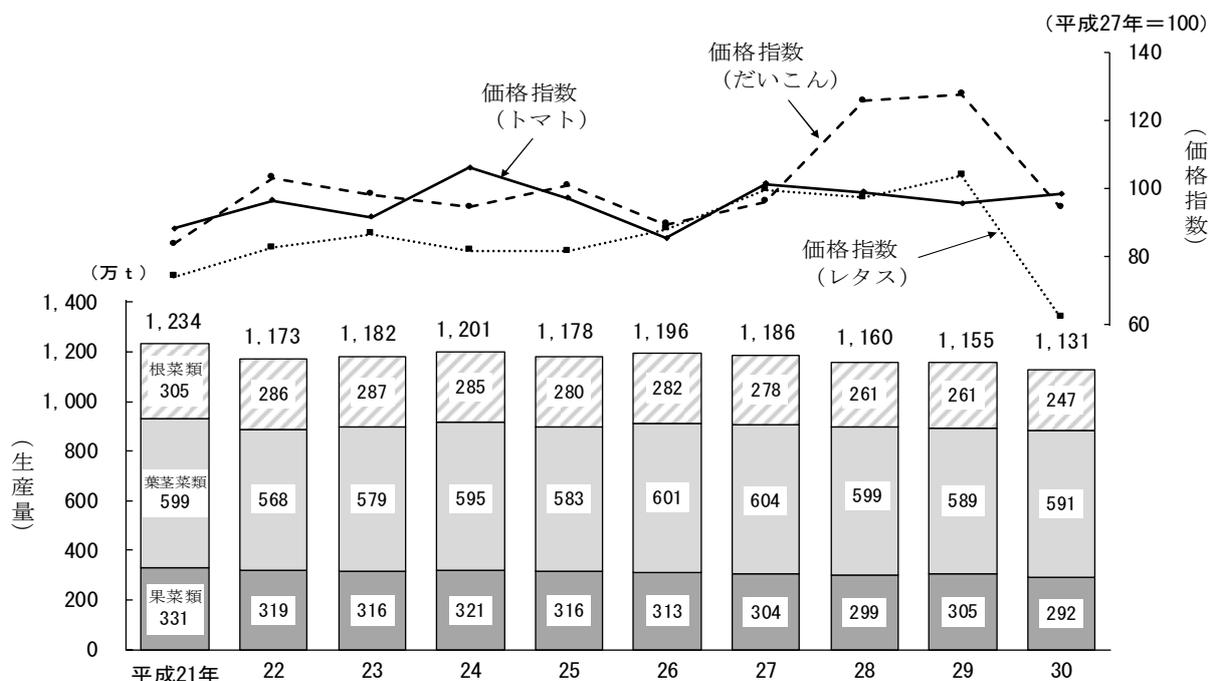
この要因としては、果菜類では簡便性や機能性、食味等の面で消費者ニーズに合致しているミニトマトの生産が拡大したものの、前年産の価格が高騰しただいこん、レタス、はくさい等の根菜類や葉茎菜類について、冬場の温暖な天候により生育が良好で価格が低下したこと等が影響したものと考えられる。

表3 野菜の産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	22,533	22,421	23,916	25,567	24,508	23,212
対前年増減率	%	2.9	△0.5	6.7	6.9	△4.1	△5.3

### 【関連データ】

野菜の生産量及び価格指数の推移



資料：農林水産省政策課「食料需給表」

注：1 生産量は年度の数値であり、平成30年の生産量は概算値である。

2 トマト、だいこん及びレタスの価格指数は、「農業物価統計調査」（農林水産省統計部）の結果を「作物統計調査」（農林水産省統計部）の年産区分（トマト：前年12月～11月、だいこん及びレタス：4月～翌年3月）で再集計した結果である。

## エ 果実

農家の高齢化や離農により、みかん等の栽培面積が減少傾向で推移する中、近年はシャインマスカット、ナガノパープル等の大粒・高糖度で、消費者の簡便化志向にも対応したぶどうの栽培面積が拡大してきており、平成24年以降、果実の産出額は6年連続で増加してきた。

平成30年は、前年に比べ44億円減少し、8,406億円（同0.5%減少）となった。

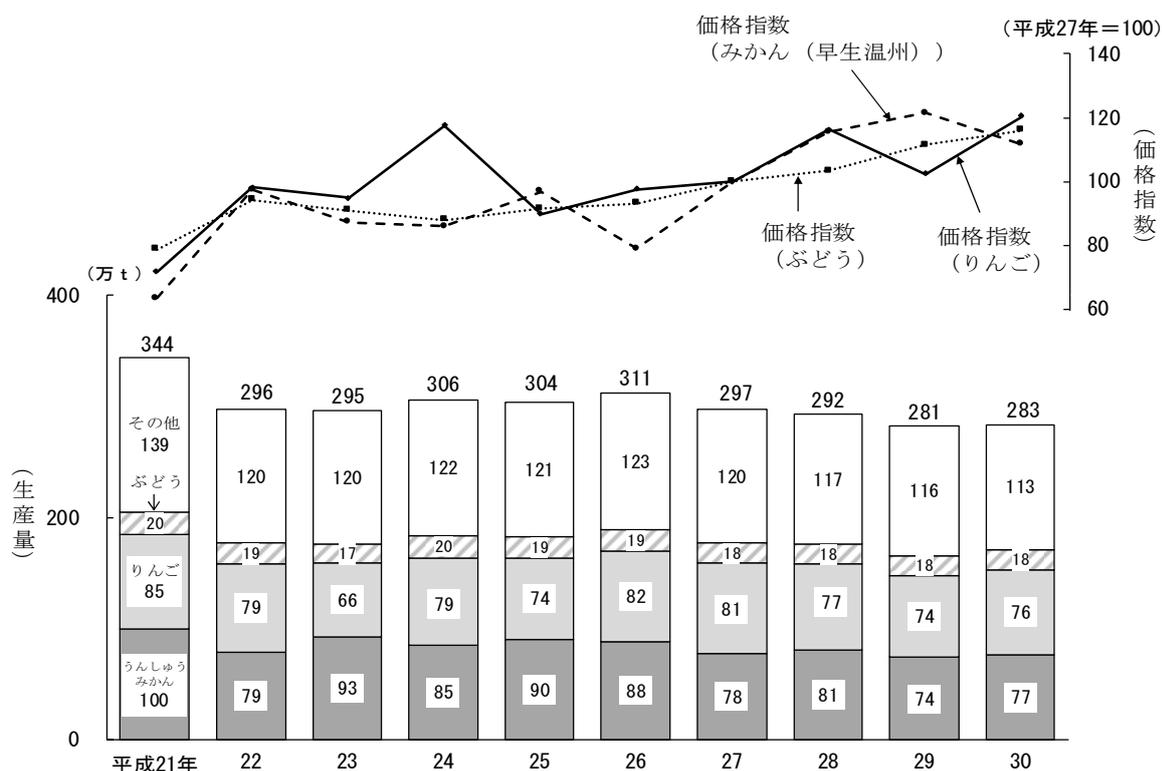
この要因としては、消費者の簡便化志向にも対応した品種の栽培面積が拡大したぶどうや、前年産に比べて作柄が良好であったりんごにおいて価格が堅調に推移した一方で、日本なし、キウイフルーツ等において生育期間中の天候不順や台風等の影響により生産量が減少したこと等が影響したものと考えられる。

表4 果実の産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	7,588	7,628	7,838	8,333	8,450	8,406
対前年増減率	%	1.6	0.5	2.8	6.3	1.4	△0.5

### 【関連データ】

果実の生産量及び価格指数の推移



資料：農林水産省政策課「食料需給表」及び農林水産省統計部「農作物価統計調査」

注：生産量は年度の数値であり、平成30年の生産量は概算値である。

## オ 花き

花きの栽培面積が長期的に減少傾向で推移する中、近年、外観や日持ち性に優れたトルコギキョウ等の産出額が増加してきており、平成20年以降、花きの産出額は3,500億円前後で推移してきた。

平成30年は、前年に比べ111億円減少し、3,327億円（同3.2%減少）となった。

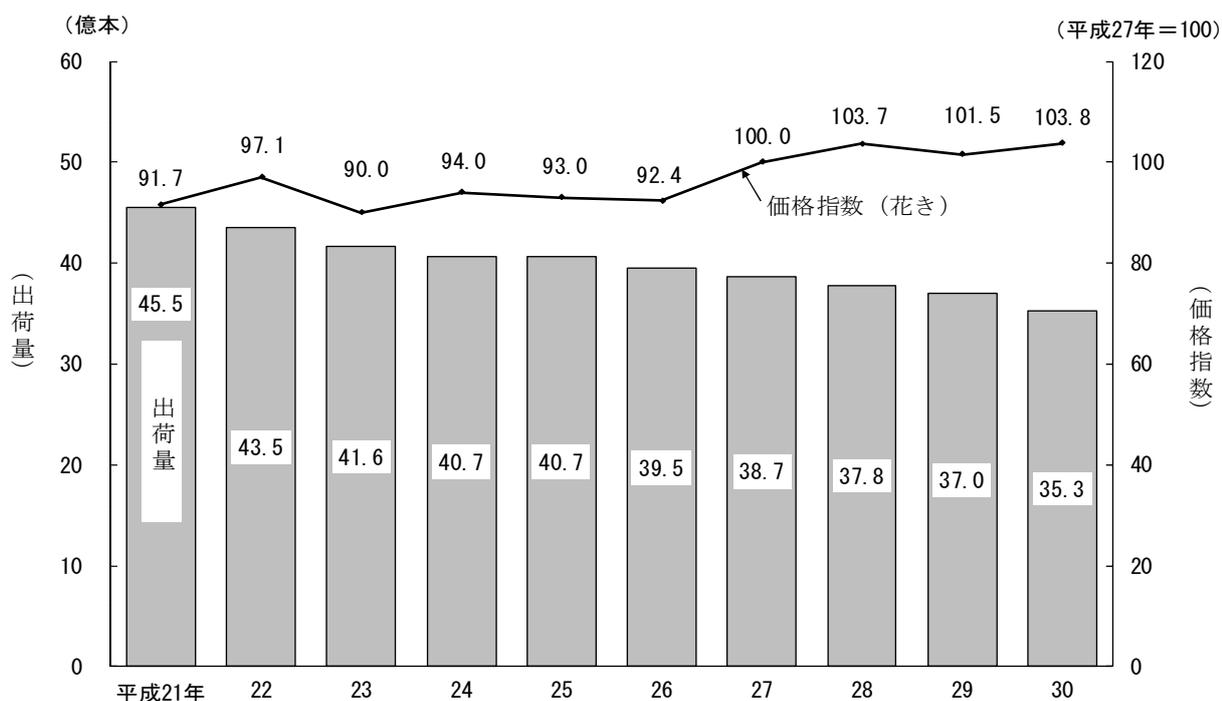
この要因としては、国産花きに対する輸出促進の各種取組（海外PR活動、バイヤー招聘等）により、切り枝等の輸出額が増加したものの、きく、ばら等では天候不順や台風等の影響、カーネーションでは猛暑等の影響により出荷量が減少したこと等が影響したものと考えられる。

表5 花きの産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	3,485	3,437	3,529	3,529	3,438	3,327
対前年増減率	%	1.0	△1.4	2.7	0.0	△2.6	△3.2

### 【関連データ】

花きの出荷量及び価格指数の推移



資料：農林水産省統計部「作物統計調査」及び「農作物価統計調査」

注：出荷量は、切り花類計の数値である。

## カ 茶

リーフ茶需要が長期的に減少する一方で、近年、国内外での需要が高まっているてん茶（抹茶の原料）や、ペットボトル緑茶飲料向けの国産茶葉の生産量が増加傾向で推移しており、平成25年以降、茶の産出額は600億円前後で推移してきた。

平成30年は、前年に比べ32億円減少し、615億円（同4.9%減少）となった。

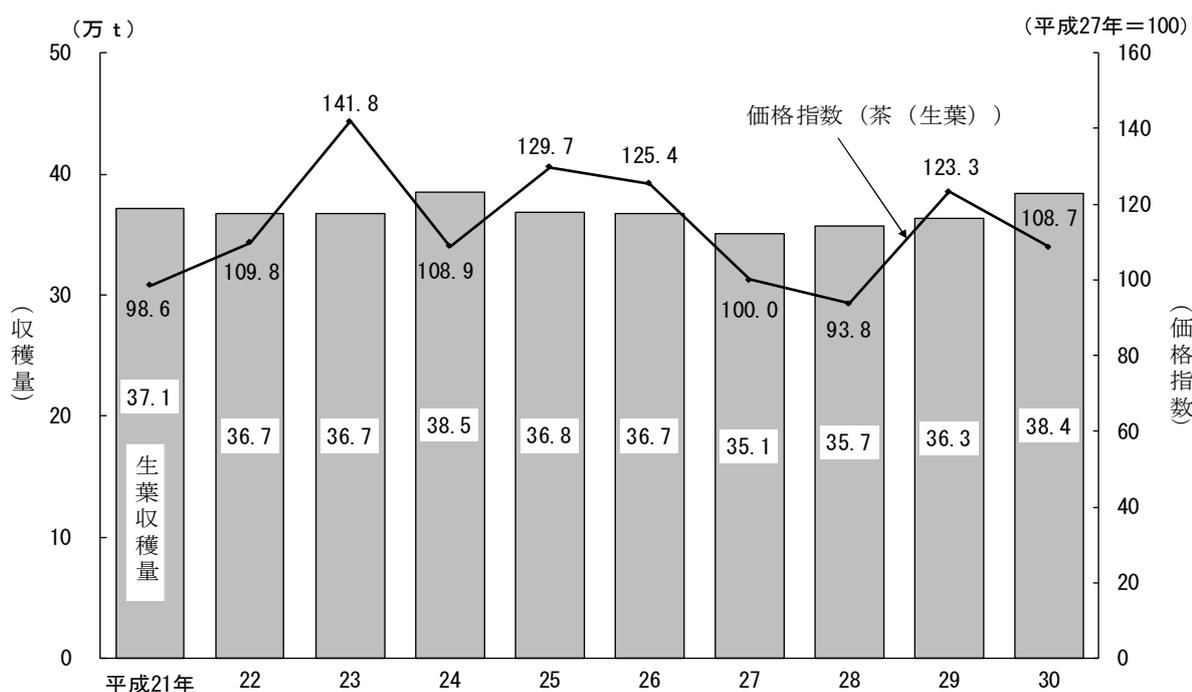
この要因としては、てん茶の生産量が増加し、米国、EU等への緑茶の輸出額が増加したものの、一番茶の萌芽期である3月中旬以降、好天・気温上昇により著しい生育の前進に伴う刈り遅れが生じたことで、生葉の品質が低下した地域が発生し、荒茶価格が低下したこと等が影響したものと考えられる。

表6 茶の産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	635	619	569	612	647	615
対前年増減率	%	△15.3	△2.5	△8.1	7.6	5.7	△4.9

### 【関連データ】

#### 茶（生葉）の収穫量及び価格指数の推移



資料：農林水産省統計部「作物統計調査」及び「農作物価統計調査」

注：生葉収穫量は、平成30年産における主産県（埼玉県、静岡県、愛知県、三重県、京都府、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、宮崎県及び鹿児島県）11府県を対象に集計したものである。

## キ 生乳

近年、健康機能が広く消費者に理解された牛乳、はっ酵乳及びチーズの消費量が増加していること等から総合乳価は毎年上昇しており、平成26年以降、生乳の産出額は増加傾向で推移してきた。

平成30年は、前年に比べ72億円増加し、7,474億円（同1.0%増加）となった。

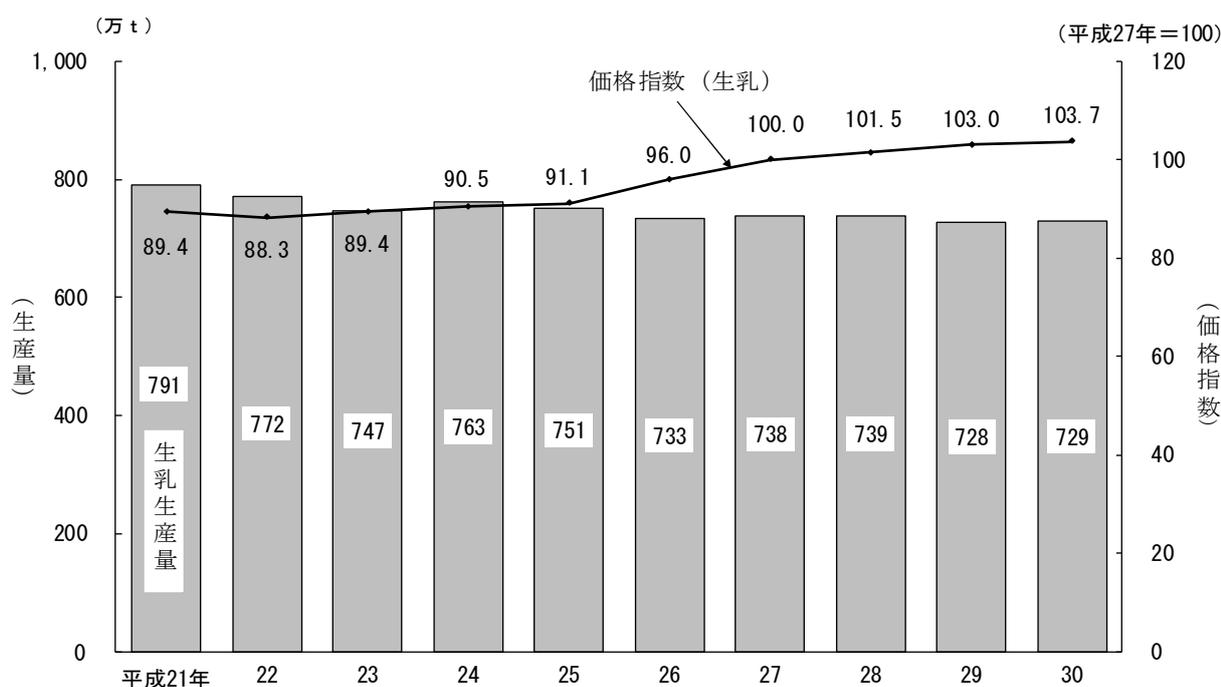
この要因としては、畜産クラスター等の事業や性判別精液を活用した効率的な後継牛生産の推進により北海道で搾乳牛が増加し、前年並みの生乳生産量が確保されたことに加え、引き続き、牛乳・乳製品の消費が堅調に推移する等、総合乳価が上昇したことが寄与したものと考えられる。

表7 生乳の産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	6,824	6,967	7,314	7,391	7,402	7,474
対前年増減率	%	△0.7	2.1	5.0	1.1	0.1	1.0

### 【関連データ】

#### 生乳の生産量及び価格指数の推移



資料：農林水産省統計部「牛乳乳製品統計調査」及び「農産物価統計調査」

## ク 肉用牛

近年、「但馬牛」や「神戸ビーフ」等が地理的表示（G I）保護制度に登録される等和牛のブランド化が進展する中で、和牛改良の進展や飼養管理技術の向上等により高品質な牛肉の割合が増加してきたことから、平成24年以降、肉用牛の産出額は増加傾向で推移してきた。

平成30年は、前年に比べ307億円増加し、7,619億円（同4.2%増加）となった。

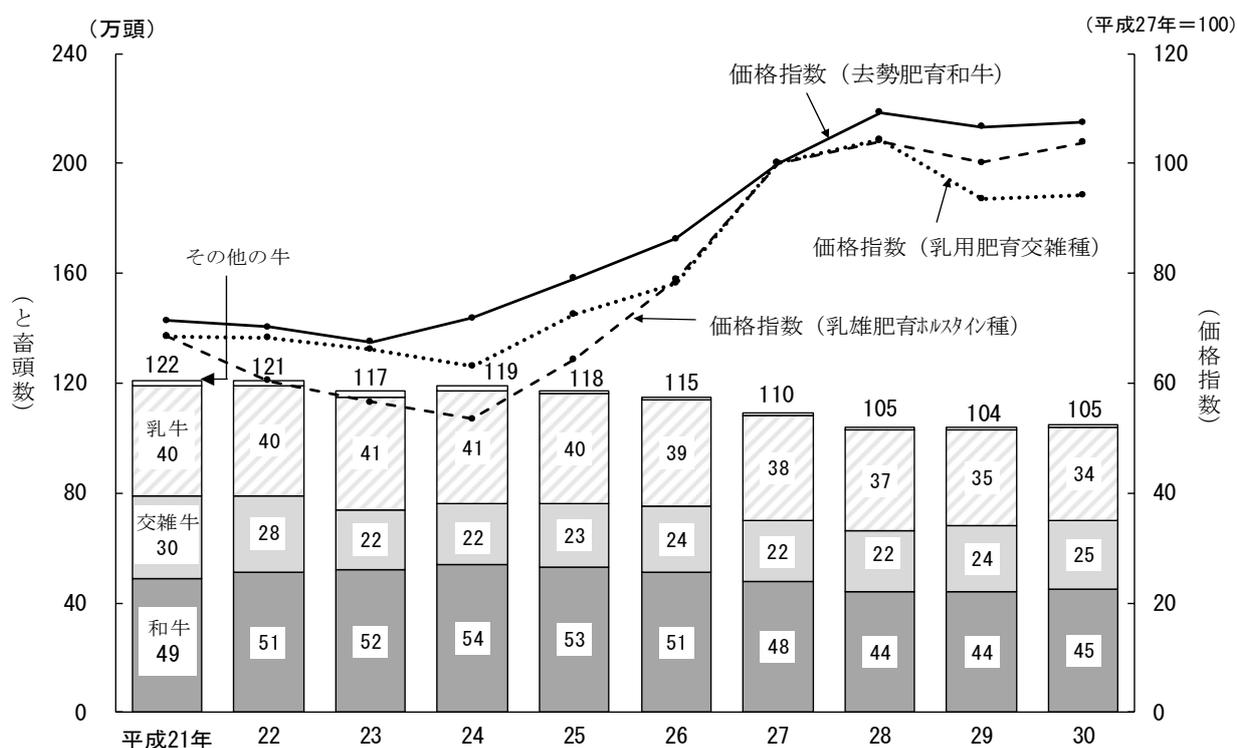
この要因としては、乳用牛への和牛受精卵移植の広がりや畜産クラスター等の事業により和牛の飼養頭数が増加に転じるとともに、価格も上昇したこと等が寄与したものと考えられる。

表8 肉用牛の産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	5,189	5,940	6,886	7,391	7,312	7,619
対前年増減率	%	3.1	14.5	15.9	7.3	△1.1	4.2

### 【関連データ】

#### 肉用牛のと畜頭数及び価格指数の推移



資料：農林水産省統計部「畜産物流通調査（と畜場統計調査）」及び「農産物価統計調査」

注：と畜頭数は、成牛の内訳である。

## ケ 豚

全国で蔓延したPED（豚流行性下痢）の影響等により減少してきた豚の出荷頭数は、平成27年以降、感染の収束に伴い増加に転じるとともに、近年の堅調な家計消費から豚肉価格も堅調に推移してきており、平成26年以降、豚の産出額は6千億円台で推移してきた。

平成30年は、前年に比べ432億円減少し、6,062億円（同6.7%減少）となった。

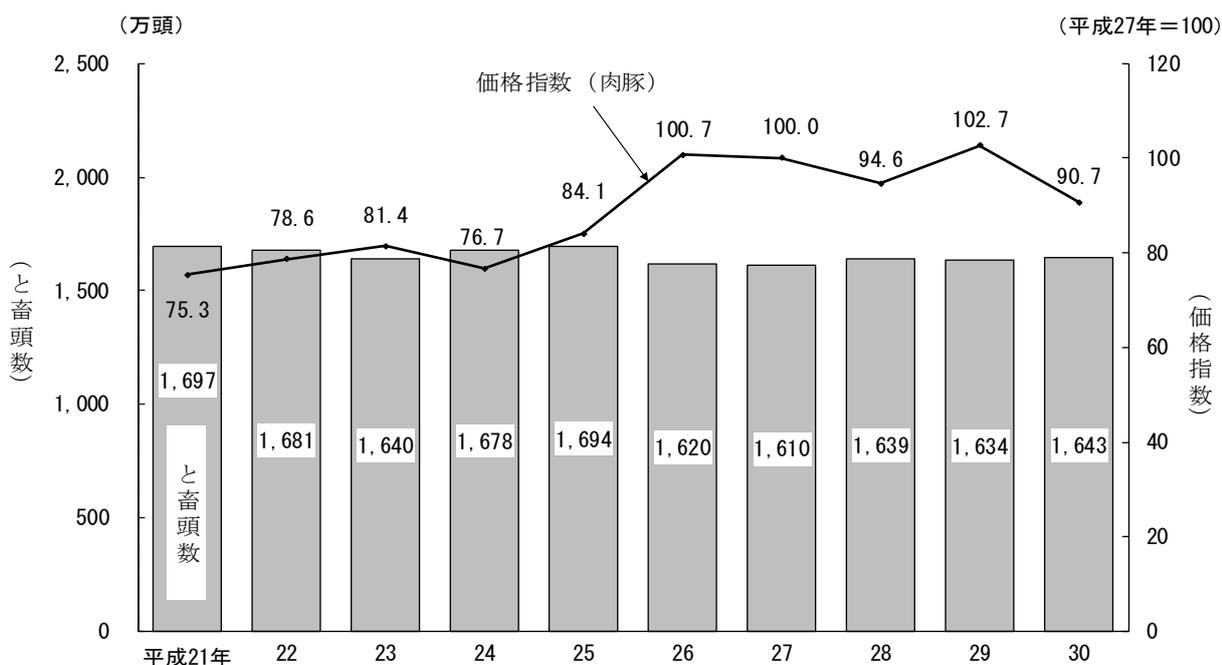
この要因としては、小規模な養豚農家が廃業する一方で大規模生産者が生産を拡大する中、伸びる家計需要を背景に平成30年7～8月には豚肉価格が過去最高水準に達したものの、10月以降は前年を大きく下回って推移したことが影響したものと考えられる。

表9 豚の産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	5,746	6,331	6,214	6,122	6,494	6,062
対前年増減率	%	7.1	10.2	△1.8	△1.5	6.1	△6.7

### 【関連データ】

#### 豚のと畜頭数及び価格指数の推移



資料：農林水産省統計部「畜産物流通調査（と畜場統計調査）」及び「農作物価統計調査」

## コ 鶏卵

近年、他の食品に比べて相対的に割安感のある鶏卵の家計消費量が増加する中で、経営の大規模化の進展に伴い生産量が拡大し、平成26年以降、鶏卵の産出額は5千億円を超えて推移してきた。

平成30年は、前年に比べ466億円減少し、4,812億円（同8.8%減少）となった。

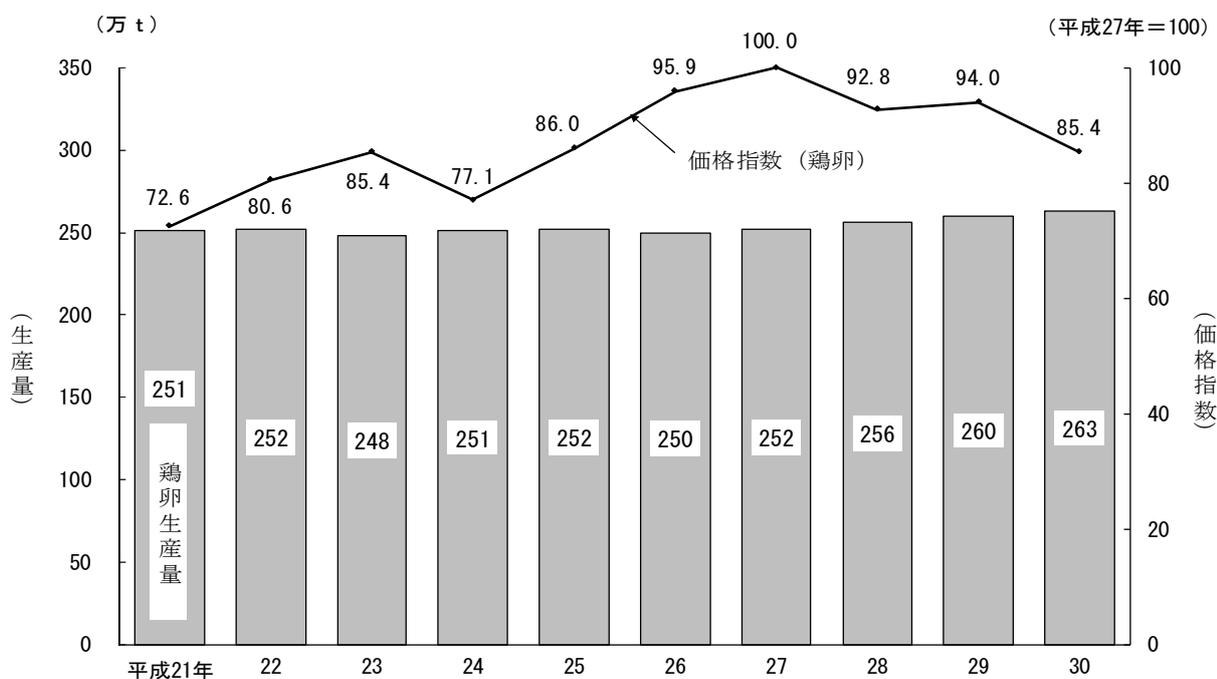
この要因としては、近年の旺盛な鶏卵需要に対して生産者の増産意欲が高まっており、平成29年以降は毎年、鶏卵生産量が過去最高を更新したことから需給が緩和し、鶏卵相場が前年を大きく下回って推移したことが影響したものと考えられる。

表10 鶏卵の産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	4,638	5,109	5,465	5,148	5,278	4,812
対前年増減率	%	10.3	10.2	7.0	△5.8	2.5	△8.8

### 【関連データ】

鶏卵の生産量及び価格指数の推移



資料：農林水産省統計部「畜産物流通調査（鶏卵流通統計調査）」及び「農業物価統計調査」

## サ ブロイラー

近年、生産から販売までを一貫して行うインテグレーション化が進展する中、鶏肉の家計消費量が年々増加するとともに、健康志向と簡便性を求める消費者ニーズに対応したむね肉の加工品（サラダチキン）等が市場規模を急速に拡大しており、平成25年以降、ブロイラーの産出額は5年連続で増加してきた。

平成30年は、前年に比べ30億円増加し、3,608億円（同0.8%増加）となった。

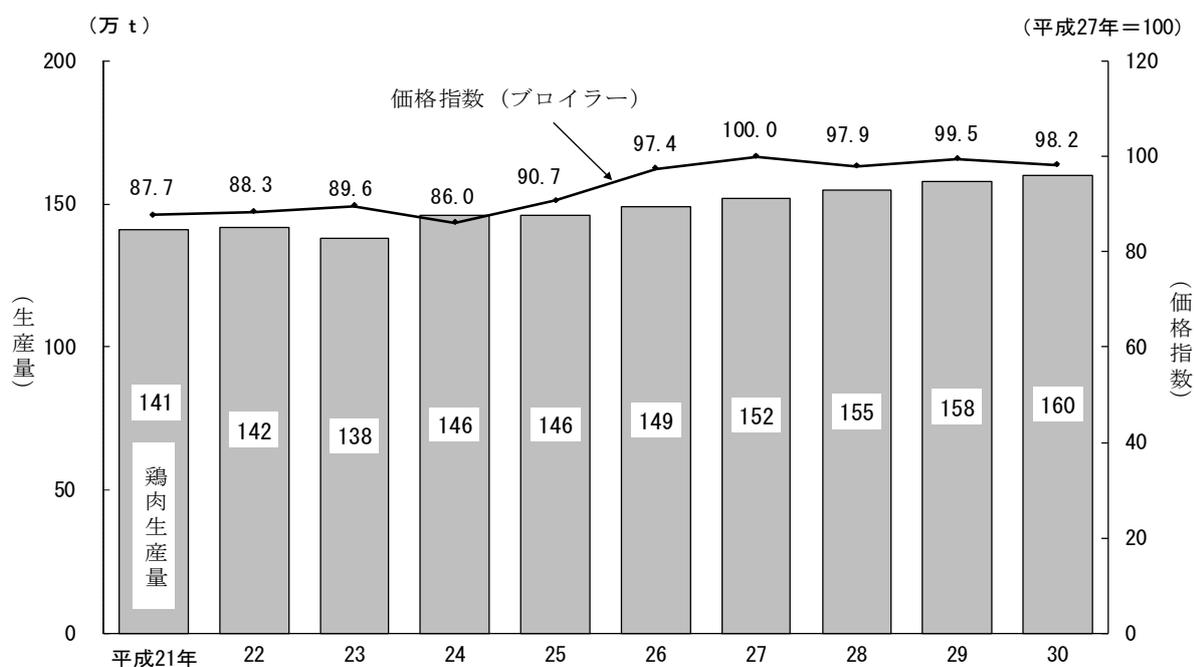
この要因としては、鶏肉・鶏肉調製品の輸入量が過去最高となる中で、近年の旺盛な鶏肉需要を背景に、ブロイラーの国内生産量が過去最高を更新していることが寄与したものと考えられる。

表11 ブロイラーの産出額の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	3,018	3,254	3,415	3,441	3,578	3,608
対前年増減率	%	5.6	7.8	4.9	0.8	4.0	0.8

### 【関連データ】

#### ブロイラー（鶏肉）の生産量及び価格指数の推移



資料：農林水産省政策課「食料需給表」及び農林水産省統計部「農業物価統計調査」

注：生産量は年度の数値であり、平成30年の生産量は概算値である。

#### (4) 生産農業所得

近年、米、野菜、肉用牛等において需要に応じた生産が進展してきたことから、農業総産出額が増加傾向で推移してきており、平成27年以降、生産農業所得は3年連続で増加してきた。

平成30年は、前年に比べ2,743億円減少し、3兆4,873億円（同7.3%減少）となった。

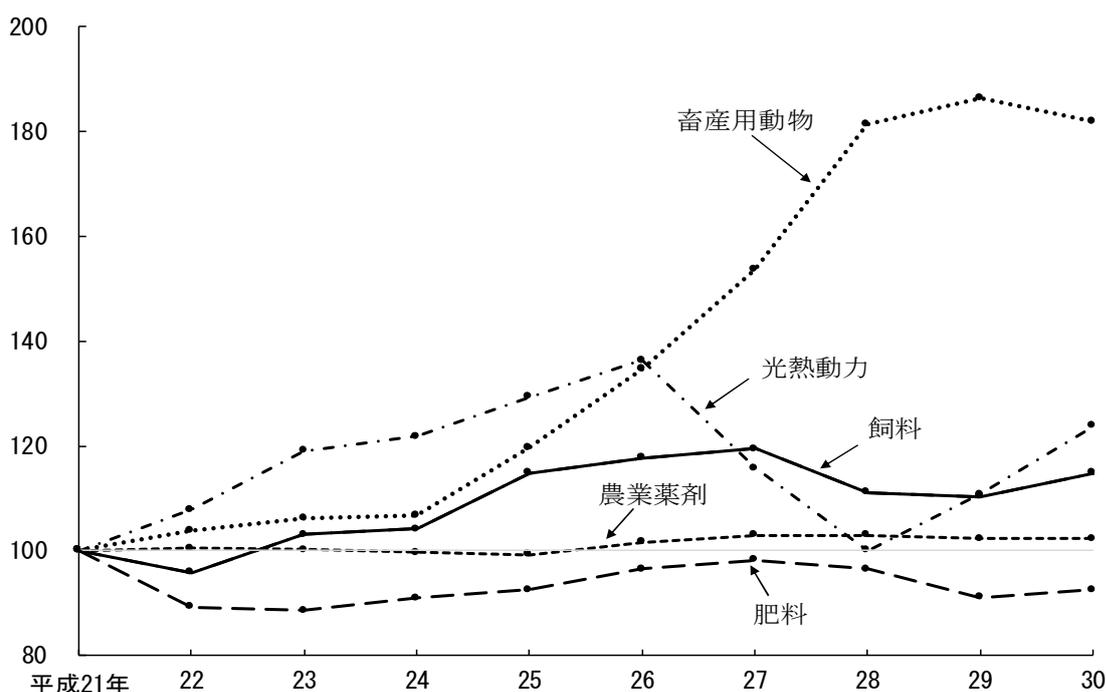
この要因としては、畜産クラスター等の事業により生産が拡大した生乳、肉用牛等において産出額が増加した一方、大幅に価格が低下した野菜（葉茎菜類）、豚、鶏卵等の一部の品目において産出額が減少したことから農業総産出額が減少したこと、協調減産に伴う原油価格の上昇で光熱動力費が増加したこと、経常補助金が減少したこと等が影響したものと考えられる。

表12 生産農業所得の推移

区分	単位	平成25年	26	27	28	29	30
実額	億円	29,412	28,319	32,892	37,558	37,616	34,873
対前年増減率	%	△0.4	△3.7	16.1	14.2	0.2	△7.3

#### 【関連データ】

##### 主要な農業生産資材の価格指数の推移



資料：農林水産省統計部「農業物価統計調査」

注：各品目の指数は、平成21年の年次別価格指数を100として平成30年まで接続した農業生産資材価格指数である。